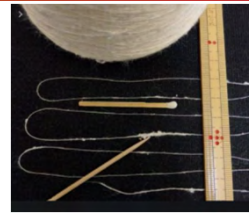


糸むら形状を利用した新規織物の開発に関する研究

研究の目的

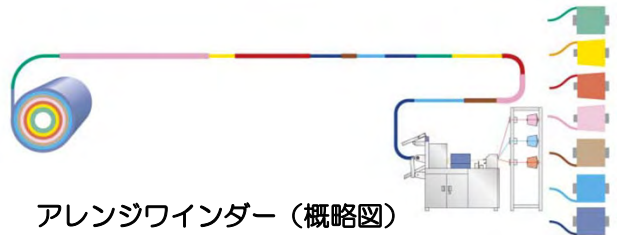
- ・播州織産地においては、綿紡績糸が主として使用されており、紡績糸の糸むらや毛羽は、一般的に製織における経・緯筋などの織物欠点の要因となることが多い。
- ・しかし近年、ネップ糸やスラブ糸などの糸むらの大きい糸を敢えて用い、スジや粒状感などの独創的な表面外観を持つ織物の開発も見られる様になった。
- ・当支援センターのシーズ技術であるアレンジワインダーを利用して番手の異なる糸を繋ぎ、周期的な太さむら形状を持つ糸を作製する。その糸を緯糸に用いて試織し、新たな意匠性や風合いを持つ織物を開発する。



節を持つネップ糸



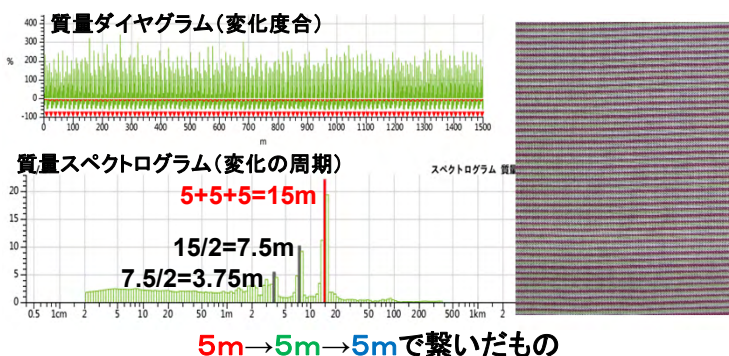
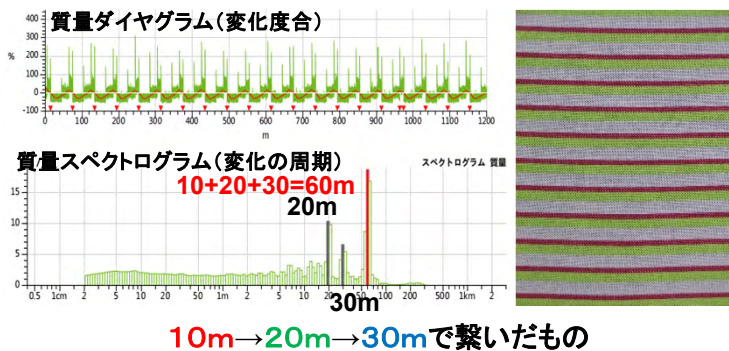
作品例（ネップ糸）



アレンジワインダー（概略図）

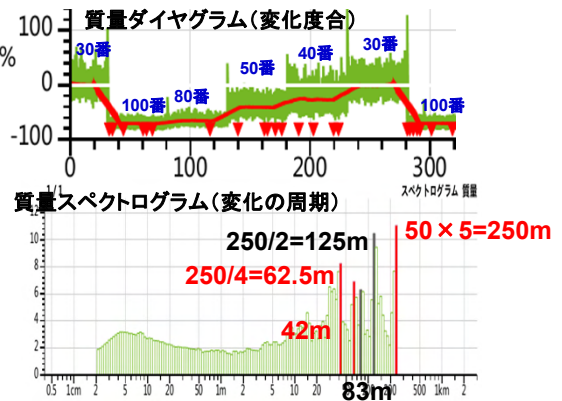
検討内容

① 60番双糸(赤)→80番双糸(黄緑)→100番双糸(水色)



5m以下は緯ストライプが崩れる

② 30番単糸→40番単糸→50番単糸→80番単糸→100番単糸(全て黒色)、各50m



30番単糸(30/1)部に軽いシボ(凹凸)

検討結果と成果発表

- ① 繋ぐ周期が5mを超えると緯ストライプ模様となるが、5mより短くなると緯ストライプが崩れ、結び目が目立つ織物となった。
- ② 繋ぐ周期を50mと長くすると緯ストライプ幅が広がり、隣り合った最も太い糸(30番単糸)と最も細い糸(100番単糸)の織物組織差(緯糸の浮き沈みの影響)で、太い糸のストライプ部分に軽いシボが生じた。

- ☆ 試織生地を用いて製品試作(カッターシャツ)
- ☆ 日本繊維機械学会 第73回年次大会(R02.6.4)にて
口頭発表・ポスター発表



繊維工業技術支援センター 東山幸央